

巻頭言

# 「教育百年の計」とは

中嶋嶺雄

新しい世紀を迎えて、教育に関する論議や提言が盛んにおこなわれている。政府による教育改革国民会議の答申もまとなり、文部科学省の新しい中央教育審議会も教育改革にさらに真剣な対応を迫られるであろう。独立行政法人化をめぐる揺れている国立大学も、いよいよ大詰めの討議を深めなければならない。問題は、大学を含む教育現場や各家庭が教育問題の重要性をどのように認識し、自らすすんで生徒や学生に問いかけ、語りかけ、しっかり教育するかであるが、そのためには教育への意欲が日常的に湧き出てくるような知的・心理的な環境が整わねばならないであろう。そのための理念的な問題に関して、若干の意見を述べてみよう。

まず、「教育」という言葉は、中国の古典『孟子』に発源している。英語の education は、ラテン語起源のものであるが、洋の東西を問わず、教育とは、有識の成人が幼体ないし未成人に知識や情報を伝達し、彼らの社会化と人格形成を育成するという、厳しくも夢多き人間的行為であった。最近はこの原点が見失われている状態を、早急に回復しなければならぬ。戦後教育の見直し、教育基本法の再検討は、この原点に立って、またその限りにおいて、なされるべきであろう。

人格形成に関しては、まず家族、とくに両親の責任の

自覚が重要であつて、学校にすべてを押しつけるべきではない。学校はあくまでも知識の伝達つまり学習に重点を置くべきである。またその場合に地域社会が補充的な機能を担うべきであり、いわゆる生涯学習は、高齢化社会の活性化に不可欠であるばかりか、豊かな人生のための最重要課題になるであろう。

およそ社会というものは、「個」の充実があつて、はじめて「公」が成り立つのであるが、「個」のエゴや欲求を「公」に託して、そのうえ「公」を批判するといった風潮が、教育の荒廃を招いた根本原因であることを認識し、反省しなければならない。

「教育」は永遠の課題でもあるので、議論し始めればいくらでも時間がかかる。しかし、「教育百年の計」こそが「教育百年の計」でもあるので、行政当局も教育関係者や国民も、できるだけ短期集中的に議論して成案を得、できることから政策化し、実行すべきである。その際、教育の国際化、グローバル化（英語教育の抜本的見直し、留学生政策の根本的改善を含む）にどう取り組むべきかも当面の緊急課題であろう。近く初等中等教育における「国際理解教育」の位置づけもさらに大きくかわるものと思われるので、この点での教育現場の積極性・創造性にも期待したい。

THE JOURNAL OF EDUCATION

# 教育ジャーナル

特集

校長へ 緊急アンケート  
新指導要領実施を1年後に控えた400校の今をレポート

2001年

4  
月号



ひと・模様

中坊 公平

教育長訪問 笹山 竹義 (宮崎県)

アメリカ的生きる力の育て方 「パワー・オブ・ラブ」

第2特集 学校に根ざした作文教育の成果